

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第96回

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭

澤井園子

物(川)に寄せて思を陳べたる歌

(巻第二一 二七〇一番歌)

明日香川 明日も渡らむ 石橋の

遠き心は 思ほえぬかも

朝、白々と明ける頃に家を出て川に向かう。空気は澄んで風もない、いい季節になった。なぜだか今日は歩きたいと思う日がある。いつものコースだが、同じではないことにも気が付く。木の芽吹きや開いていく花、鳥の声、日の傾き、月の色。歩きながら身体の声にも耳を傾ける。あそこが痛いここが張っているという声をなだめつつ、たまには禅に習って呼吸に集中してみよう。吸って吐いて吸って吐いて……。日々無意識にしていることだけれど、今こそ、この瞬間だけを見つめると、心まで整っていくような気持ちになるのは不思議だ。凡人なので、すぐに入り込む邪念と呼吸を繰り返し、いつの間にか土手までやって来た。

「明日香川の名のごとく、明日も渡っていこう。石橋のように離れて置かれる間遠な心は、考えられないことよ。」愛しい人に逢いに行く時、そこに川があると自ら大ぶりの石を運んで並べ、飛び石の橋を作ったこともあったという。万葉集でのその表記は「石走」であることが多い。急いで渡る、跳んで逢いに行くという情景もあるのだろうか。流量によつては足が濡れる。時に石は流される。それでも行く。明日も行く。想いがあるから人は動く。「私がかつて渡っていたあの石橋は今はどうなっただろう」と懐かしむ歌もある。若い頃に通ったあの橋、あの川、青春の遠い記憶はふとしたきっかけで、心

によりがえってくる。

また、機関誌の号に合わせて、百という漢字を調べてみた。百は「一」と「白」に分けられる。「白」は「ハク・ヒャク」という音を表し、意味は示さない。よつて「百」は、「ひとつヒャクがある」という意だが、他に「百に至れば一に帰る」という話がある。また一から始まる。百という大きな塊のもとで、新たに一つひとつ積み上げていく、そんな始まりの時とも言える。初心に帰り、また歩み出す。目の前のことを大切にしながら、これからやってくる何気ない途中の景色もまた、日々楽しんでいきたいと思う。

明日香(飛鳥)川は、奈良県明日香地方を流れる川で、奈良県高市郡の高取山を源として大和川に入る。写真の歌碑は、奈良県高市郡明日香村稲渕の明日香川のほとりにある。すぐそばに石橋があり、古からの行き交う人が彷彿とされる。

朝日が川の向こうに昇ってきた。光の線は真っ直ぐに自分を照らす。この輝きに包まれるとなぜだか「ありがとう」の言葉がわき上がってくる。やはり来てよかった。明日も、そのまた明日も、命の限り自分らしい「一つ」を積み上げていこう。



奈良県高市郡明日香村稲渕の歌碑